詞花和歌集

特別
へ4
8099
6

^4
8099
6

< 2001-018 >

詞花和歌集巻第一

春部

城河院の御時百首の内に春の部

大蔵卿匡房

春の来ぬと聞くより消ぬる雪の上に吹

寛和二年内裏歌合に春の部

藤原惟成

きみがすむ宿の前なる山の端を霞の隠すなるかな

天徳四年内裏歌合に

平兼盛

[illegible]

そゝぎて當乃ゝ色をきゝて　道命法師

たまさかに[illegible]

影不知　曾禰好忠

雲きゝは[illegible]

冷泉院春宮と申[illegible]百首[illegible]

[illegible]　源重之

[illegible]

鷹司殿の七十賀[illegible]

[illegible]

[illegible]　前深湛門

[illegible]

梅花遠薫といへる　源時綱

[illegible]

梅花とよめる　右兵衛督公行

梅[illegible]

影不知　俊恵法師

[illegible]

[illegible]　後京極摂政

[illegible]

信都貫雅

[illegible]

天徳四年内裏の合に柳をよめる

平兼盛

[illegible]

贈左大臣家の合によめる

源季遠

[illegible]

源道済

[illegible]

源頼政

[illegible]

京極前太政大臣家の合にまちかねてよめる

康資王母

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京極前太政大臣

[illegible]

廉資王母

白雲はいとたゝ八十てゝ[illegible]

一宮紀伊

同所合歌

朝まつ[illegible]

大納言匠房

[illegible]

嘉暦二年内裏後番所合歌

大納言公實

山ちかくすむよりの[illegible]

遠山桜

前祐院出雲

九重にいろそへてみるは雲ゐの桜かな

[illegible]

戒秀法師

[illegible]

白川は花乃よまきりてゝ

源俊頼朝臣

[illegible]

白川院御製

[illegible]

橘俊綱朝臣伏見の山庄にまかりて水辺橘花を海
こえぬるの　　源師賢朝臣

世をのがれかの池に橘をうゑおきけるを浪よせきたりて
一条院御時のことなりけるを橘をうゑてまうでたりける
をりに橘をうゑおきけるをとりてかの
よりてまうでらるべきよしをいはるる

侍従長実

いかにのちの世の人ぞ橘をうゑおきしかのあるじ
新院の御かくれの百首のうちにまうでたりける

左近中将教長

世をのがれかの池に橘をうゑてまうでたりける
人くもまきてうゑたりける花をとりてこれにおくり
てまうでける

源光雅

橘をうゑてこれにおくりてまうでたりける人のもとへ

道命法師

春ごとにかの花をとりてこれにおくりてまうでける
梅花をよめる

贈左大臣母

山ぶきのかちにのこりしやまぶきのうつろひにけるを
をくにいろをかへてとりてやなりける花のうつろひにけるかの

さくらの花のちるを見てよめる

藤原元真

櫻花ちりぬる時にあへるかな春をしたへる人にあらなん

天徳四年内裏の歌合のよめる

大中臣能宣朝臣

ちるを見ばうらやましかりぬべしいとはるかなる春の日の光

大皇太后宮賀茂の斎院にさくらの花をたてまつりて

さくらの花にかはりてさかりなるに秋たちぬとはいかに君を

へてぬるかとつけたる

橘清

櫻花ちりにしかとも春をまつ人の心にかよはかり

すみなれし宿の櫻はちりぬとも春をまつ人の心にかよはん

つもりて後のちるを見てよめる

後頼釣臣

さくらの花のちるを見ては春をまつ人の心にかよはん

櫻後總釣臣の母の山居にまかりて水辺櫻花と

ふることを思ふ

源仲賢朝臣

ちるさくらあはれとはいはじとしをへてはるをまつ人の心にかよはん

藤原為房朝臣の家の老人惜花のよめる

藤原為範永朝臣

北の方を尊とし奉り給へ、我の身ゆゑ行ひ給ふ
産の稚子ちの御門に仕へて世を経給ふ

花山院御製

ちる前にさてなほ見ちる時にたちまさりてもまさる
ちる花のちる御門にてしらぬ

源俊頼朝臣

月よかてはるしよりの雨ふる我世のふるさと
落花満庭といへる心を

花園左大臣

庭に世よりけるちる花とかはりて花のちる物
新しき次

大中臣能宣朝臣

ちる花は世にたとへらるる山河のちる水
寛和二年内裏歌合

藤原長能

紅葉ちるなかれとてとどめぬ山の嵐
藤原殿女房家の歌合よりの

人人の次

風さへはかしてやきれ山の嵐のちるはひとりの恨
堀河院御時百首歌よりの

太皇太后宮肥後

[illegible]人とまうす孫山のもとに[illegible]
新院位よりたちまちの時牡丹をとりあつめよ
[illegible]

閑白前太政大臣

[illegible]

老人惜春

[illegible]

[illegible]

三月盡よりのちのこころもおよばずして春の
[illegible]

新院御製

[illegible]

[illegible]

詞花和歌集巻第二

夏

四月一日によめる　増基法師

けふよりハ夏の衣にうすくともあつしとのミや[illegible]

題不知　俊頼朝臣

雪の色をぬすみてさける卯花ハさえてや人にうたかはるらん

新院の長官にて侍りける[illegible]よみて賀茂祭の使して侍りけるをとふらひきこえし[illegible]侍りけれはよめる　大蔵卿長房

年をへてかさし[illegible]

神祭をよめる　源兼昌

榊とる夏の山路やとほからんゆふかけてのみまつる神かな

郭公をまちてよめる　周防内侍

むかし[illegible]

関白太政大臣にて郭公[illegible]十首よませ侍りけるによめる　藤原忠兼

[illegible]

題しらす　花山院御製

[illegible]

山寺にしはしこもりて侍りけるに[illegible]よめる

道命法師

傅大納言道綱卿の子也天王寺別当なりしかは人も身をかくやまの

能因法師

俗名不知

山ひこのとふらふやまの住む寺一しなけは二枚れさく

承暦二年内裏歌合に

藤原伊家

卿の子あるかけとく呼ぶ名とよふ孫覚なる人やさきの

大納言公教

給非はあの我もなすれは卿の子ねは若君は知らされ

閑中時鳥といふ事にてよめる

源俊頼朝臣

なれはうきわかれのとこ寺觀しおもふ人のまさに見へ

待賢門院堀河

さ

しらす

忠実地をはなるゝ御屋敷の御ひとむさしのゆかりのそれにまれ

右大臣の家にくらへ合し侍りしによめる

源雅家朝臣

あはすれたく水鶏ハちのこゑをあけくれしに啼さ

皇嘉門院別当

まて

太皇太后宮亮源俊隆女也かくしも川八十瀬の浪それをまちの谷

皇嘉門院の比時百首哥よみ侍りけるによめる

大納言通房

右大臣師房公の長男母は源倫子の腹

源忠季

さかえ道、雅楽の調べをはじめとして、ものまなびの道

都前門院菖蒲の根合の人

中納言通俊

ちかい国の国の国人たちはすべて斉衡の

藤原通宗朝臣の合の人

良暹法師

さ月雨に花たちばなの風ふきて里まで匂ひ来たる

世にもなぎの花とはいらじ

花山院御製

宿ちかき花たちばなの色とりて昔を忘れぬ人ぞ恋しき

たちばなの花を見て

藤原俊綱

うすくれなゐの花の色にて

贈太政大臣家の合の時の

源理大夫頼季

立秋の日我宿にこれの花をうゑて

寛和二年四月廿六日合ふよりの

大貳高遠

[illegible]

六条右大臣家より合しのけにより

讀人しらず

五月雨の物川よりかすみたちのぼるを見て

曽祢好忠

松川のいそちかくすむうき舟の長恨の人の家ぢうきを思ふ

長保元年入道前左大臣家より合ふ

源道済

まつりよりあとの秋の日の暮を待

曽祢好忠

詠不知

けふよりは夕立すなと思ふ人の

同六月七日小よりの

望太后宮大貳

[illegible]

相模

[illegible]

曽祢好忠

[illegible]

詠不知

詞花和歌集巻第三

秋

題しらず　曾禰好忠

山しろの鳥羽田のおもをみわたせはほのかにけさは秋風そ吹

摂津国に住侍けるころ大江為基任はてゝのほり侍
にけれはいひつかはしける　僧都清胤

君すまはとはましものをつの国のいく田のもりの秋のはつ風

七月七日式部大輔資業かもとにてよめる　橘元任

萩の葉にすかくいとをもさゝかにはたなはたにとやけさはひくらん

四月十日に出家せられ

花山院の御製

なきよを夜もぬけてかたぶくまでの月をみるかな

兼盛二年内裏の合よりの

なにはめしたかすと行くと言ひて

歌しらせ

加賀左衛門

いつの世にはなちあやめもしらぬ川ながせよわれ鶴なくと

新院の仰せて百首の歌たてまつりしにより

左京大夫顕綱

ちはやぶるかみのいかきに

寛和二年内裏の歌合よりの

大中臣能宣朝臣

みそぎ川ながれ水にしるしとて流れてはやき瀬をしぞ思ふ

左京大夫顕綱

あすかがわ淵瀬をしらぬ

橘俊綱朝臣伝見の山庄にて七夕後朝の心を

良暹法師

あかつきの別れは恋のはじまりぞ

後京頭綱朝臣

ちかきまもりつかさの久しくかはらぬ別当に侍けれは
詠し侍る　祝部成仲
天川舟のかよひちかはらしやましらやもりみゆらん
三条太政大臣家にて八月十五夜に水上月と
いふ事をよみ侍りける　源順
水清き庭にうつる秋の月さへや千世まて見えよとすむとすらん
詠し侍る　右大臣 雅定公 久我太政大臣雅實男
いにしへはおもひし見えたる月影の秋もこよひにてすみまさるらん
家に歌合し侍ける所によめる
左衛門督家成

春秋にきこえやはかはる秋の夜の月にもいかて思ひいつらん
月を浮詠んしてよませ給ける　三条院御製
秋にまたあはむあはしもしらぬ身はこよひはかりの月をたに見ん
題不知　天台座主明快
あはれにもかゝる浪たつ世中にかはらぬ影の秋の月
関白前太政大臣乃歌よませよある
藤原重基
秋の夜の月のひかりの山は木の葉とゝもにちりやしなまし
法輪寺山乃会侍によりて月をみてよめる

あまの風を吹たゝめたる秋の月

良暹法師

冥白前太政大臣家にて八月十五夜の月を

ひく弱よかけをあらそふ逢坂の関もらでぬる月を

京極前太政大臣家にて名所

藤原頼通朝臣

秋の来る月まちかねぬ山の端を

たゞ待ぬ成家ぶ方合ひとりよりて

隆源法師

物思ふ秋の月をかなしみ

月を待つ人の心

大江為言

あさ秋の月まちかねぬ山の端に

月落山ぶかしといふ

為忠卿

秋山の清水にうつる月をみて

寛和二年内裏ぶ方合よりて

花山院御製

あきの月よりのちこそ雲井よりそめとて高ぶ

影不知　源道淵

ひとりぬるものとは宿は萩の露　秋の夕暮

萩の露にそでや袖風吹なれ　大江嘉言

袖ぬれぬ人やあるらん萩の露　和泉式部

袖ぬれぬ人やあるらん萩の露　曽禰好忠

尺とり野のきさ山ひけばたてる松いく秋風よそにきくらん

萩の露ゆゑ露ゆゑ　藤原俊成卿

萩の露ゆゑ露ゆゑ　源義昌

夕暮は雲の上人ゆゑ　法橋顕昭

法師にはてきる小袖濡れぬ　赤染衛門

秋の野の花ゆゑ露ゆゑ　賀茂重保

賀茂の社の時雨の透垣に　藤原為家

乃花の咲ぬるかぎりて　後京極摂政

秋の野の花ゆゑ露ゆゑ　藤原定家

城河陰の時雨の透垣に　藤原為家

隆源法師

ぬしや誰こし人の小萩が男里は野辺にかをる匂ひは

白河院鳥羽殿にて前栽合せさせ給ひけるに

周防内侍

うつろはむ露をばかりの萩が枝におきゐる露のかげのさびしさ

敦賢親王

萩の葉にむすぶ白露を人もなくたまとぞ見けるにほひなりけり

題しらず

曽禰好忠

秋の野の草もしとゞに露けくは風ふかくぞ露はなかりける

永縁法師

風はらふ浅茅が宿は露もおく虫の声こそあはれなりけれ

和泉式部

なく虫のひとつ声にも聞えぬは心々にものやかなしき

みちのくに任はてゝのぼり侍りけるに尾張の鳴海の野にて

すゞ虫の鳴き侍りけるを聞きてよみ侍りける

橘為仲朝臣

ふるさとにかはらざりけりすゞ虫の鳴海の野辺の夕暮の声

天禄三年女四宮歌合によめる

橘正通

秋風に露をなみだとなく虫のおもふ心を誰にとはまし

駒迎をよめる　大江匡房

あふ坂の杉まの月のなかりせはいくきの駒といかてしらまし

永承五年一宮哥合によめる　出羽弁

きく人もなかそやさらぬ秋風は又しら山とをけく啼らめ

題しらす　藤原伊家

秋霧を菊のはなかにむすひ置て朝日にもれる色そひさしき

九月十三夜に月照菊花といふ心をよませ給ける　新院御製

秋ふかき花には菊の世なれはや月もそなたをかへりみるらん

関白前太政大臣家にてよめる　源雅光

霧ふかきしめと見つるは白菊のうつろふ色をかけけるにそ

題しらす　道命法師

心して又はくる花もありぬへし菊のあたりにしくるゝ風をたえよ

曽祢好忠

菊の色をまさるとみよと霧たちて秋のくれにも白菊のをる

宇治前太政大臣白川にて見残菊といふ事を

よめる　堀河右大臣

関こゆる人にこゝろやみちのくのあさかの山にまさる白菊

武蔵国にあるのうりの山に
をりて
橋俊元

いくとしもみなれぬ紅葉にすがりて
寛治元年大皇太后宮大夫合歌
大弐四位原

冬来ぬとなのりそめしかしぐれ
鳴不刻

山里はあさぼらけ道もみえぬまで
雪ふる時は物さびしかりけり
曾禰好忠

ひさかたの月のかつらの木の葉
ちりしく時はさ山なりけり

道命法師

雨後前栽
雨はれぬ前栽の秋を紅葉の錦とぞ
思ふ
源俊頼朝臣

名月
月のあるき秋をみるかたちをみてよめる
平兼盛

月見て
月見ては月をこそ思へ秋の木葉を風の吹
一条摂政御集の屏風より細殿に紅葉ひまなくうゑる
かさの代の和歌

秋の夕べ紅葉かつちる山のふもとにみてゆく

藤原雅成

初霜をよめる

大中臣能宣朝臣

冬の来ぬとたれかはしらぬ初霜の夜の間に色つく小倉山

雨中九月尽といへる題をよめる

前大納言公任

ながめこし秋のなごりの宿にはあらじとのみは

曙もせよ

詞花和歌集巻第四

冬

部立次

曽禰好忠

かぜをいたみ岩うつなみのおのれのみくだけてものを思ふころかな

楸なる浦の藤なみ立ちかへりまたもあふべき春にあらなむ

家小弓合に侍りける歌をよめる

大貳資通

こすもとをかすめてかをる梅の花たれかはるばる来とはるべき

部立次

左京大夫顕輔

あらしふく時雨にいとゞ紅葉してあすはいかばかりの錦なるらん

山路を見わたしてつゝみかねる雲よりは月ぞ
落葉堀水といふ所にてよめる

惟宗隆頼

海ちかきにとの、橋をたゝしそめて未紅葉もさこそ
落葉をなをなをとつゝみそめたる
風吹はなを紅葉の世よりくもてゝ
新しらす

曾禰好忠

三山なる紅葉の中に桜をうゑ風をきくゝ
ちるを人にとゝ

大江嘉言

山路を見わたしてつゝみかねる雲よりは月ぞ
落葉堀水といふ所にてよめる

惟宗隆頼

海ちかきにとの、橋をたゝしそめて未紅葉もさこそ
落葉をなをなをとつゝみそめたる
風吹はなを紅葉の世よりくもてゝ
新しらす

曾禰好忠

三山なる紅葉の中に桜をうゑ風をきくゝ
ちるを人にとゝ

秋深紅葉のしたれをうかゝさをそ月はさゝけらはを
赤山の百寺にて夕暮はかの所にもれいるあり

左京大夫道雅

ちるを小山をうつす時雨のいとゝ
板宿時雨にて

藤原公任

鹿さはの鳴ゝ時雨ちる月の雲は時雨ふる
天暦の時四屏風の絵代に紅葉にほくらをこゝ
ろにそ雨ふる

平兼盛

源山のいはやにやとる時雨ふる

鷹狩とゝのう　　藤原長雄

なゝ瀧つかゝ所の人々くらゝ衣笠重なる宿子人〳〵あはせて
城の院の時百首の内にてさけうゝのゝ

大蔵卿匡房

山の人屋くすの人かゝの瀧たて屋ゝ宮けのもとゝ成けり

大和物語の人ゝ伯きゝの時入道太政大臣より弾て初君

藤原義忠朝臣

をゝくゝ

年とくゝ所の山ゝ人々れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

影不知

大江新言

四ゝゝ小山ゝの人ゝ山ゝ人ゝ面ゝ人ゝ屋ゝ君ゝ

大蔵卿匡房

ゝく山ゝ山ゝ人ゝ人ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新院の位ゝ位ゝ内〳〵時君中此臣ゝゝゝゝ

よゝ也ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

開白前太政大臣　忠通公

ゝよゝゝ水ゝ人ゝ君ゝ重ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新ゝゝ次

和泉式部

ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

成務法師

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

曾根好古

むさしの国ゆとの郡にいなりの小川の辺にあるもの

すなわち

詞花和歌集巻第五

賀

一条院上東門院に行幸せさせたまひしに

入道前太政大臣

天の川の流れをくみてくらすとも千とせをかけてたのまむと思ふ

月日をうたへる人々

伊勢大輔

めぐりあふ月をまちてし甲斐ありて夜の更けたるかたぶきまで

一条院太皇太后宮の御方の歌合に

よよの

大中臣能宣朝臣

[illegible]

京極前左近大臣より合しきりふみ来る

大蔵卿 匡房

元々代々[illegible]ふみ出すもあさ日はたゝ[illegible]

長元八年宇治前左近大臣歌合よしあり

能因法師

元無[illegible]ものかはけくゝ秋の岩ゝてきれ海となりまた

詠しらす

赤染衛門

榊葉をとゝにいろをそりて紅つゝ神の代ゝをゝしる人

三条左近大臣乃家より屏風の絵よ花みゝる人

書たる所如しゝ

中務

わゝそのゝ[illegible]ゝ桜もたゝ家ゝ[illegible]

[illegible]人の子三人かゝりせ[illegible]

清原元輔

[illegible]

[illegible]

天喜四年四月廿四日后宮乃歌合ふよ世[illegible]

後冷泉院御製

長濱乃[illegible]

上東門院御屏風ふ十二月晦日乃[illegible]

前大納言公任

一世世と書なれてなかりけれはさつきとはなる世世に云とまつよ

河原院よりくはうてゐ合〜なりけるかはらの松原池と

恵慶法師

秋かりの池のもとにもはなりけんうこかぬ舟よりはなれぬる事と

後三条院位におはしましてよりのち

後人不知

元つ代のいとうるさたりしかは神もうるさんに位をは

後嵯峨院とをりて位をはなりてゝ後

大納言俊信

すはらはなりけるかはしらてくらいをはしりうるらん

詞花和歌集巻第六

別

参議廣業卿くまのゝ伊勢寺にて人々歌をよみ侍
つかうまつる　民部内侍

和泉式部

通宣よりとて侍りける　和泉式部

左京大夫頼カ賀朝臣の家にて人々歌をよみ侍
きる　源俊頼朝臣

ものいとをくて侍りける頃頼通殿に侍りけるに
橘則光朝臣陸奥守にくだりけるに餞し侍りて
よめる　藤原浦手朝臣

ことのはをたのみ侍りけるに人のたのもしは
ぬ事をなげき侍りけるに　藤原道経

かゝりこむ程はたのもしてなげ
大納言経信左宰相中将にて下侍りけるを河尻より
つとめてよめる　津守國基

六条右大臣まうで侍りけるに

清水に侍りける女房九月日頃に下りける餞にたまふとて
又給ひける　一条院皇后宮
わかれ路を日かずにかぞへて思ひ出よ秋はまたねかりめと
東路に侍りける人のもとへやりて同じ国に出
でたるに装束つかはすとてよめる
法橋有禅　永縁僧正弟子
別路の草葉をしげみ旅衣たつよりかねてぬるゝ袖かな
月ある人のもとに立寄り侍りけるが帰りける日
しにおくれける　玄範法師
みえむとは誰もおもへど今朝のまにかはすべからぬ名残かな

唐へわたり侍りける人にいとま給はりけるによめる
寂照法師
ゆくまでもむすびしそ（云ひ）たちまち涙ぞつゝむ袖の拾
人の子とは小田にかへりて別れ路の日数はよそに給ひける
僧都清胤　秀次朝臣男
道ありとみえし人をとこそ我人まれなりけるに別れ
大納言経信太宰帥にて下り侍りけるに其後嘉
ゆくきれもいかにうしとぞ
太皇太后宮甲斐
忘れてはまた都をのこすかなしさは人目はしのびてよ

梅為仲朝臣陸奥守にくだりける日皇太后宮
乃大進和ものとそて之雅こはなくて
東路のつゝきの道をゆくとりの声かなくもくれぬるこゝ
陸奥大夫源秀之宰大貳にてくだりける
馬にのりてつかはしける
梅信正永孫
さらぬ別ゝなれはいきの松原に風の音乃聞ゆ
東へくだりける人に屋をかりて侍りける暁
さらぬ別ゝなれはいきの松原に風の音乃聞ゆ
よ見人しらす源 俊偏靡

詞花和歌集巻第七

戀上

題しらず　　開白前太政大臣

あやなくも我が山本にもゆるかな思ひ知らぬ人をこそ思へ

題しらず　　藤原實方

いかでかは思ひありとも見えむとぞ海人の焼くてはくゆらん

かくばかりあはれとぞ思ふ　　隆惠法師

城河院に時百首歌たてまつるときに

大蔵卿匡房

なにしおはばなにかは人の思ひしるべき　しのぶる恋

題しらず　　平兼盛

忍川の底にながれてゆく水の表にいでぬ思ひなりけり

春宮の宮ぬ日兼雅殿女御のもとにつかはす　　一条院御歌

ちとせにぞつもるべき年月かかれとうゑしたねなれば

兼雅四年内裏歌合よ

藤原伊家

わが恋は岩ぬ小のたえたえとしのぶる人をたのみてぞ

新院位おりさせ給ひし時よろつのこともとゝめおほ
しめして殿上の簡といふことも絶にけれはよめる
左衛門督公能
なくさむるかたもなくてや見はてまし雲の上なる月のまたるゝ
寛和二年内裏歌合によめる
藤原惟成
数ならは行末もあらん世中にいさしらぬ身をかこちけるかな
左京大夫顕輔の家に歌合し侍りけるによめる
大納言成通
よしさらは我ゆゑにこそ人もとはめ人のつらさをなにかうらみん
題不知　寛念法師
恋しさは思ひしれともいはすとも行すゑしるき人のこゝろか
法師に成て女につかはしける
賀茂成助
いかはかり人のつらさを恨ましうき身のとかとおもひなさすは
左衛門督家成の家に歌合し侍りけるによめる
藤原顕保
本云依作者
いかにせむ葛の葉ことにふく風のうらみしとなき人をうらむる
題不知
浄蓮法師
我ためにつらき人をはおきなからなにの罪なき世をやうらみん

女をあひしてしらぬ所にまかりてはつかの夜よりのち
いかなる所にかくれかくれかくれかくれ女のかくれ
いてつかまつる

平兼盛

ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる
ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる

新古今

寄せてこそもゆれ寄せてこそもゆれ我が思ひ
ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる
ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる

後人しらず

なにはがたみじかき芦のふしのあひだをあはでこの
よをすぐしてとやなるべきといひてをりけるに

後鳥羽院

ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる

法師

ものをとなりてのちとなりたるこゝろをとなりたる

ありしてこそ思ひまかりをる女をいとゝ忘れがたくて
世のなかをいとはしてまかりてきたりに来たる
けるにこゝろをとなりてのちとなりたるこゝろを
つかまつる

前大納言公任

一千とせにかはらぬ世界をつくりはすゑるものとて
三井寺よりのぼりつゝ京にいでゝ岩ゐ
をつくりてこゝろを京よりいでゝ岩ゐ
をつくりてこゝろを京よりいでゝ岩ゐ

僧都覚雅

新古今

秋の月をみてこゝろをなぐさめかねてこゝろをなぐさ

ほのかにみける女に七月七日つかはしける

大納言道經

七夕にけさ引いとの露をおもみたわむ氣色をみてややみなん

題しらず

隆源法師

身のうさを思ひしらるゝものならばやまずあはれ人の情なるらん

左衛門督家成の津の國の山庄にて撰歌合に

ふるさとによめる

見し人もあれにし宿の萩はなほさかりにみえて露の宿かな

冷泉院春宮と申ける時百首たてまつりけるに

源重之

風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくだけて物を思ふころかな

堀河院御時百首歌たてまつりけるによめる

修理大夫顕季

ゆきはなほ山のこずゑにかゝれどもなかなかいつとまつ人ぞなき

題不知

平祐挙

むすぶ手にしづく袖も清水の宿るやをしき涙もためし日ぞなき

藤原永實

いはつゝむつもれる錦木をとりはこずしにつかひしまさりて

春になりて思ひそむと云ひける女のもとへあるまじ

しきのうしきにみそはいつかけしけれ

山橋つゆ小ちく人きえのこる八重の白雪

道命法師

城河院の御前にて人々に仰せられけるに

仰ぐ女を思ひてかくひ仰ぎをとて人々詠ませ

受て白雪はよしてつゝ久

源家時

雪をとる人のもとをうらいくだもかたうる義乃とれ

仕事女よかたりて

大納言公実

こゝ義乃かたるぬ多をたのまれしてくも秋の道

中納言俊忠家乃うた合よ

花の顕綱朝臣

弘乃こゝあれよ衣うゑ白ふきむ恋のなをさ丹色乃ゆ乃屋と

影しらす

源道濕

こゝの重と濕て色乃れ弘よ乃ゆ袖ハそむ人乃見給

文ゝ乃ゝ世乃女ゝ乃ゝ者乃ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ乃ゝ

ゆ乃ゝ世と仰けゝ道ハつゝ乃

源雅光

れゝ井ゝ濕乃色乃成ゝ乃ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

左京大夫顕輔乃歌よ乃合ゝ仰乃ふゝ乃

平實重

逢しみん今日をかきりの枕しつる露うれ絶つる世も無いこそ

題不知

道命法師

住よしの浜わすれ草よりもて知ぬるとう様しきことは浪よこえ海し

藤原道信朝臣

う様しさはいつかはかはまゆ今日は身かは世をわすれそはつ

しゐの山よ谷合ふかれよろしの

心覚法師 父ハ少将信經男

逢とれしわらきに身をも身をそへてかくまてはかなき世にこそ人をしのはめ

題しらす

大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火の夜はもえ昼はきえつゝ物をこそ思へ

読人しらす

見の逢や伊勢の人のすてころも逢てといふはかれも年をへぬれは

山寺にこもりて日ころ侍りて女のもとへいひつかはしける

藤原範永朝臣

かへるさをはせ契とも山川のたえぬは程もなきものとしらなん

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原親隆朝臣

風寒はしられぬ枕とらにはかくいと冬もかるゝもの

題不知

新院御製

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはむとそ思

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詞花和歌集巻第八

戀下

人に忍ばれて侍りける女のもとにまかりかよひ侍りけるを人のとがめ侍りけるに
ひとしれぬ思ひ侍りしかども
　　前京兆相如

元輔がもとにまかりかよひ侍りけるを人のとがめ侍りけるに
　　藤原道綱

ひとしれぬ思ひをしてしかども
　　清原元輔

女のもとにまかりかよひ侍りけるを人のとがめ侍りけるに
　　清原元輔

秋ごとに物思ふ人の
　　前京兆大夫藤原伯倫

秋ごとにはつかりがねは海の面にやどりをしてぞ
　　前京兆藤原廣相朝臣

女のもとにまかりかよひ侍りけるを人のとがめ侍りけるに
　　藤原實方朝臣

竹の葉に霜置くあかつきの風よりなれて聞くぞ
　　長月のつごもりの夜に女のもとにまかりかよひ侍りけるに
　　人に

尺寸人丈行む日重て我をとゝく善ゆく歓を送る

菊原保昌初任ふて丹後国へまゐる日とけるふた

のしてゆくいきろたとこよをとゝ行ろ〜言葉

和泉式部

我のみやこいとこせんもりさかく人の世をもとる道也

花清門猶家成の乱よ言合〜伯ろふまち

菊原範綱

行らしかさ源とのて忘ろたるてあるしもれ

物ゝいろ女ろりて人ゝいつろ〜まち

大江為基

行ひ（ひいてい）なくて色ろ世中ふつ丹（ろ）よりろとろあつろ

我ろ色を源まうてきけろ男ゝ秋ろけろ日ろ雨

もころろ立れ朝よゝいつろ〜まち

一条紀伊

たろ〇ろ色ろけるとつもひろ色ゝ秋ろもあな

女ろとこ海ろろ名ゝろゆ花屋のくさ色ゝ人今も

えゝんゝふまち〜ゝいもて伯道ハ

坂上明基

世紀とゝの花まの水色とゝ秋ろ色ゝいろ和とゝ

歌不知

恵慶法師

[illegible]

寺慈安人といふ所にて

右大臣

いにしへを[illegible]

たとこふ[illegible]て歌[illegible]八月[illegible]前

[illegible]

[illegible]

赤染清門

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平仄成　イ読人不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たとえ九重にかくれぬとも
人の名はいとゝ
高階章行朝臣女

たりひとまかきひの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

律師仁祐

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大僧正行尊

うゝひとの花の
花嶋貴家成の十月つごもりの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中納言國信

[illegible]

[illegible]

藤原仲英卿

関白左大臣のたまはくよまうす

藤原基俊

[illegible]

[illegible]

清少納言

[illegible]

横人[illegible]次

[illegible]

中納言通俊卿

[illegible]

[illegible]

中納言通俊

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

相模

[illegible]

[illegible]

讀人不知

[illegible]

詞花和歌集卷第九

雜上

[illegible]

源頼家朝臣

[illegible]

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

同御時百首うたてまつりけるに

ちりぬるかぜのなごりにはなをしのぶとてよめる

惟方

惟方寺に侍りける時よ三月はつかに雨のふりて

侍りしに桜はなほ山ちかくて雨の来て侍りけ

るをみて侍りける

平忠盛朝臣

おりゐたる花をはなほ山ぢかくて雨

降れば雨をもをしまるるかな

やどもまた花のくもりにまがひけり

花山院御製

春ごとにたがはぬものをうぐひすの

なくこゑのみぞ人まちがほなる

ちるはなをおしむこころのとまりけり

なほ春かぜのなごりなりけり

天台座主慈心

ちるはなをおしむこころのとまりけり

花をおしむ心をよめる

大蔵卿匡房

さくらばなあかぬうつりにうつりてはいくのあかぬ

春をかぬらん

宇治前太政大臣花見に侍りけるとき

よめる

藤河右大臣

為[illegible]て[illegible]をうちもりて[illegible]花のうえはうのきれ
二条宮白河の[illegible]花の[illegible]をいとせて侍るよ
よりの
大納云道經母
十穂ばかりこれ数はたらやうに我とうえたりし山吹のうち
新院位のたとし時右京のかみの四方に上達部
えらびをれこれをかうして為花年久と海
せ所きりかよ[illegible]
大納言帥物
寄白山小乃為のこと[illegible]
源頼大夫顕季義作るよ侍るう時人々[illegible]て

右近馬場よりうつして部屋の侍りけるを侍
従をれ女房の車をよりて[illegible]
おとりて四のうよりかをりの女房の車を
義作やくをれ[illegible]山と[illegible]
こうの事をせしとい侍る[illegible]
賜左大臣　為長宮
わうの浦といふ所をうたよりて[illegible]
左衛門督成布引の滝人にまうして[illegible]
よしをうの
為忠隆季卿
雲井よりたきの[illegible]

新院位おはしましし時四位のくに水草領船と
いふ所をあらそひ侍りし　大蔵卿行宗
雅師　源慶（興福寺法橋有圓男）
思ふ事もなくてはかりなるやうこそ侍りしとて侍りし月入とりもたん
ちく永賢信法寺内くに下侍りしかの小海の
ほとりの所をあらそひ侍りし京大夫那浦の亀の
合戦の事なりよりあらそひ
花京為賢
若かたきをとる侍りしをみかはもあらひしかりし月入りさ

月入りくに侍りし亀人へくまうてきたりあそひ侍りし
水月入よりられけりつそとのくに亀人と云
亀入よりし　大中臣能宣朝臣
月入人をいておはしましあてひらの我とをとりもん
四方にはいくはしたる花はいくはしたる六条院の池よ月より
ひかりをあらはしてよませ給ひし
小一条院御製
池水に宮殿月入なりなりしかの新そかたりあ
左京大夫顕綱中宮亮ふくに侍りし時下所うよ
出入られしてこ夢て女房の母小歌りた

月をみる世事ふかくはなるてよるの
世事をたのしみ遊てみさ山にすむ月のすまんこころハ
田家月といへるよませられける
新院御製

月清し四季にそなはる秋なれとこの夜の月の色ハ
新院位よりたちの内にて月前述懐
うつ世をすてしこころ世ハ人
三条内大臣 後実房 公実公男
清つ月ひかりに秋をなれてゆく
月をすてし宿ハ月ハ
大政大臣 後実房 公実公男

秋ふかき月ハ
月ハ不知
白大臣 法大寺 後実房 公実公男
白雲にたのしの杜の三ツ時ハ
山家月とこころ
源道潔
さびしさの家出ぬへき山里をこころいの月ハ
新院殿上ゆく海路月と海ハよろ
平忠盛朝臣
ゆく人の元ハ方ハ雲ハ波ハ月ハ
彰しらす
橘為義朝臣

良暹法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大納言公實

[illegible]

花山院内大臣

[illegible]

[illegible]

中務卿具平親王

屏風の絵に山の峯にて月入る人書る所

よよの人

大江為言

かゝる山の峯にて月入る所

家の方合しの人

左京大夫顕輔

秋の夜すがらの月の光を清く澄て実に出る月

山路に散る紅葉の錦をまとひ月のあてをはる秋
てきてうけるものいとゝ物あはれなるもの

藤原浦子朝臣

山ちかくすまゝしかは柴の戸をたゝぬ人なきまで月のあるさまを見つるかな

久しくとゝまぬ人の

中原長國

月のみそむかしにかはらぬ秋なれやもとの人にもあらぬ

山階寺の僧うらうけの宋延法師のもとにまかりて
物がたりするに月の三笠山にのぼりなるとみてよめる

林賢法師　栢義法男

なかめこしかすみのうちにかくれぬる山のあなたの月
京極前太政大臣家の合のよめる

大納言匡房

物思ひの宮の柴の戸をたゝかれて月のあるかとまをあけ
ぬるをまつとてきてうるはしくすまゝしかは
月のあるしるべもなくすまゝしかは
物思ひはよもあらじ

神祇伯大臣

つねくとあるまてうる宿柴の戸に月のあるを見
新不知

柴の戸をたゝかぬ人のとはやとて山のあなたの月のあるかな

高松上

[illegible]
服れいなりける　和泉式部

[illegible]
[illegible]
[illegible]

たりめうの和尚とこれ法を問うてきさ
つとうるよ出あんとうきをしれとい俺くさく来事を
ちうせいりあるといいを世ちうげまてよりう

清水納言

うちいくさは我よなるいうちうのめてあ祈りとし
かきをえくうれとこれいく思んきてうきうかう
ちうの曉よ西乃いくなりうちうげまへ朝よいつう

江侍従

かつ来ん人たりは西かいくせうめくいたてを三重て

歌ちう次

當麻奴志

ちうをしをたりさいうるむ赤少ゆ寄ゆををるくゆく
いくをよいうる男ひくをいく若せいりげまへいつう
ちうけう

赤深清門

世乃人のまくちうねまれうと砂みちうの滝よ滑ゆと和と思ふ
ひとちうきう男ハ八月ちう神の影けさるくいつさ
ちうの事よう秋影

和泉式部

秋ちうれ思ゆ毎ちうれ萩の葉を来たちむ寄ハちくいう
藤原隆時ちのいきう女ちうきれ弟遠清の
ちいの行ちうを祈ちうくちう遠行ちうけまハ遠清の弟滝童

小町はいとゝ愛くかろ女やいとつゝきろ

荻原忠清

八つ重て岩の間ろ根の水小ゝもさのこ月の屋ろ

桐模

鄙之源

俗ろ酒ろ酒ろ酒

人乃世よりてしたがひ始なり　大貳三位
　　紫しら波
　　尤大弁俊雅母
久勢よりさきの帝とそ千也ものを弱ゆ
　　長元八年宇治殿大臣の娘よりの合し給ひ
　　勝方ものとりこもる位をかまへて奇よりの位をう
　　母よりの
　　式部大輔資業
位を浪ふしいとまつ松ゆをあるとれあり
　　もの西ゆきを道より人乃高藤とひきうけあるこ
　　祖母ありてこそ世をうかれ行けまいらの

　　周防内侍
いそうは祖とうれしもうあるはなるもそ世ひき
　　冷泉院
　　花山院御製
世中ゆかしるれ行のうい乃人年とたてさきうか
　　御製
年をあり行乃よとしをあしてもこの世をうくひそ
　　男とうそくうう
　　和泉式部
ありまとてかもこの山乃頼よりこのとくひき
　　中の国こそ行といこ前よりこうのそ前大納言公任の

[illegible]

[illegible]

結国法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源仲正

[illegible]

[illegible]

平経盛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源道濃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

橘為仲朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左京大夫顕輔

[illegible]

陣前内大臣のよばれうの時参りてやまいは
なくよみうた　　馬内侍

春の霞みやこうちのこそもてあそびくも鳴くすみ
坂河院の時百首うたよみけるにいとうた

大納言師頼

ながめこはるかすみのうちかとぞみるもいはのもとうとて出てき

大蔵卿　匡房

むかしの春はさはくいまとていはのの花のやいはのもとうた

　　影不知

大納言俊通

今をとくむかしをとくはいはのの花のやいはのもとうたと云事あり

小野宮右大臣のうたよみ侍りけるに前うて首うたよみこと

清原元輔

ちとせをかけてかすみのうちをまちてこそ花のさくらまちけれ

　　影しら波

賀茂政平

やまとのうみとうたよみけるとなりけるとなりけり

　　新院の御よ百首うたよみけるのうた

藤原季通朝臣

いとどしくもとはれぬさとのあるかなとうたよみ

　　祇伯顕仲廣田のくうかんにて

とうたよみけるとなりけるとなりけり

雜後撰ものまの歌合

左京大夫顕輔

ながめ侍りし月をこそ

たつさはりとこそ

詞花和歌集巻第十

雜下

郭公を

源俊頼朝臣

郭公なほ近江田上といふ所にゆきて

かへ山をくやまの橋は無事とかくるに山ぢ風ふく

なかれよりはるる橋をみくく

紅葉ちりのこるくつもりのうちにかすみて

はるさめ

ほとゝぎす

なかれ

ほとゝぎす

なかれ

ほとゝぎす

なかれ

新院六条殿よりたてまつりける
秋の夜をてらさぬうらの月前言志
世所なるかよる人なるなり

右近中将教長

三月の又五日のよもすがらやうやうなるたなびきたる
桜花ちるをみるよりの

藤原實方朝臣

ちるをよみるやちとせの春の月
世中をはらへてのこる

増基法師

あさぼらけ霞のうちにうぐひすの
初音をはつねのこえ

源経元

花ちるをのこりすくなくなりぬれば
ちるをしるべの風のうらめし

てよもの

花ちるをのこりすくなくなりぬれば
ちるをしるべの風のうらめし

西院中宮

我をのみ花のあるじとなりぬれば
世中をはるのあるじとなりぬ

花山院御製

かくれぬる山のはのつきよりもなほ
かくれぬる山のはのつきよりもなほ

入ありしうちよりとをときてよりう

和泉式部

名誉ハ世ニ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

殺人刀をこいひねけまへ形ふつうて毒を仕こ
よろう　大僧正行尊
この世ゆへ又もあふまし梅花ちりくゝうんをそなる春
ちりなる行くゝ勇四月に仕ることを
人のこゝろ仕らせて仕けまへ人をそう
ゆくをはじめうきゝゆとこうなる命ことを
影をゝ次　増基法師
我なをもあよれをけきふかゝ無ふをうゝ枝をゝ秋神
大江以言
ゝ務ふ月むみゝゝ花なゝゝ宮ゝゝ我仕ま
大京よ仕ゝあけゝ法後御朝臣ゝ洋ゝひつゝ
良暹法師
大けゝやまゝすゝかまふなゝゝゝゝ宿のゝゝ仕ゝ
影をゝす　賢智法師
吸川ゝゝ水上をゝゝ月ゝは世のゝゝゝゝ
山集をゝゝ仕ゝて家集ゝゝて仕けまほゝゝ
右近大臣
なゝゝゝゝ水のゝさけまへゝゝゝ人東宮殿
関白内侍尼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大納言医房

かりそめの紅葉の雲の色にそ[illegible]
法師になりてはらの月の
雁をとゝめて

海路帰京　沙弥道一　飛鳥大遠　信濃道祖

[illegible]
[illegible]

為[illegible]人　海[illegible]
[illegible]

猿人　不知

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

左宮大右京肥後

[illegible]
下[illegible]
[illegible]

大中臣結宣朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

清寺図書

雲乃之八月ノ末ヨリ病ミ給フ程ニ行ノ
ヤウ　　修理大夫顕季
こゝ河ノ水ハ（はるけき）ト仰ケレバ
新院仰カラ　　時ノ
思懐ヒ入ル　　ヨリ
わとゆく時ノ　　ケレハ

大納言成通

白川ノ女ノ袖ヲ　　ハ
城河院ノ時百首　　中ニ

大蔵卿匡房

百ヲ世ハ新ノ　　ノ
新院仰ラレ　　時中宮春宮ノ女房ノ
ノ　　ノ
ノ　　ニ
ノ　　カ
ノ　　ノ
ノ　　ケレ

新院御製

久堅乃（弐ウシ）
ひとゝ　　ノ

本朝世紀ニ云ハク

左京大夫顕隆卿近江国ニ行幸ノ時ニ従ヒ奉ル

源義国書

ヲ

新院位ヲ御ス

開白前太政大臣

ヲ

海龍泉院ニ行幸ノ時大堂金色ノ基方ノ屏風ノ絵中

国ニ金山ヨリ

藤原家忠初度

ヲ

今上天皇御位

山田ヨリ

永久大史顕頼

ヲ

永久の山田ニ

当験院ニ時

当験院御時

水上のぢくめて後八元代よりてしとよりかりつかは
有馬の湯よりゆきをはるよりの
宇治前太政大臣
いそもしくそのこころをたつねる報恩寺の長人よりの記をそえ
紙墨へまうてゝ後の道よりて月をみるよりの
左兵衛督
都のうちの月をもいてゝ物のこゝろをもいてゝ物のこゝ
ろをさしに伯きの時月をみるよりの
帥前内大臣
みやこのうちの月をみる時物のこゝろをもいてゝ物のこゝ

信法寺のくてゝ下はる風巡寺のくよりの
藤原家相朝臣
風しの月影のこゝろをもいてゝ物のこゝ
藤原頼任朝臣義法寺のくてゝ下はるのうの海の
月をみるの年月をへくゝ後の国のもに成て下はる
て春ゆとゝ月影をみるくよりの
藤原隆祝朝臣
音のたゝ物のあかるのこゝろ物とゝ月の影の年八重よりの
帥前内大臣とゝ海へまうをはるのて河原を出
月日をみるのきの
大江匡言

[illegible]

三条大政大臣為世

前大納言公任

[illegible]

[illegible]

[illegible]

栗田右大臣為世

為尭相如

[illegible]

[illegible]

[illegible]

園執院内裏

[illegible]

一条摂政為世

[illegible]

[illegible]

[illegible]

だいそうてかまをあてゝ茶くしこしをのいてゝあけてゝ杖と如

天晴ニ門かくまを出ゝ海ゝゝ七月廿七日御開忌

えてゝらりゝに海の白と生ゝる小女衆中よりとゝ行る

宮ゝゝ宮氏の務ニ立ち行迄いりたる所ゝよりえんとすん

也事

清原文脩

侍人不知

女人ゝゝの宮ゝゝをゝゝなりのひん宮ゝゝ白ゝゝ者ゝ

ひとあゝとゝれて無くき行ゝゝよりゝ

非祇伯殿仲

あさまゝゝ云ゝきゝゝ人ゝすゝ人澤ゝ衣ゝ神ゝ我ゝゝる

大江匡衡ゝゝゝゝてみゝゝゝ花をゝゝゝゝ

赤染清門

出ゝゝ芸花ゝゝ花ゝ咲ゝゝゝゝゝゝゝ

右参詣ニ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てゝゝさゝ事行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新院御製

入ゝゝゝ入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後冷泉院御歌

しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤原有信朝臣

[illegible]

たとこにをくまてよもやう

[illegible]

人の雪十九日の頃紙文よりきつけ申

人とも婦乃ちとて歌すまこ[illegible]我身にをんとすん

ふるさゝいろして伯きの女のあゆさをれてよらるる

自身海の色にきれいを見ねけの

[illegible]

人間生死ありけるなら人て世はれとけるきつ海し

稲荷乃名ゐふりきつけ行方

[illegible]人とも次

かくてのこ世ふるの時月のこ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]よ[illegible]

社屋の取ふ[illegible]人[illegible]

事ふ[illegible]

法師乃美よ社乃四方をこい出なきる所

なりきよ[illegible]事を[illegible]

賀茂の河きよ伯[illegible]

[illegible]

選ま四歌を

信解不同流諸四五十余年といふこゝろは

弥陀伯所仲

わゝ[illegible]

即身成仏といふこゝろは

讀人不知

[illegible]

会利塔の次より形成仏道のこゝろをいはんとなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以前為大納言為世卿年一授早
以大貳重家卿宣旨之
作者并哥頭數如叶目録之相違

清輔記云

詞花集和哥百首新院御讓位後敎長卿
一人撰之天養文年六月二百卷者令撰之御覽之後
御氣切〻并敎範卿感狀未到除帯為御使相兼
被務參議人金葉集流布殊三度令ノ之八不滿之由
令知人歟也

宣下狀云

被院宣云 自中古以來不入勅撰集之和哥
宜被撰集者仍執達如件 敎長謹言

六月二日

修理左京大夫殿

參議敎長卿

詞花哥数

一春 卒一首 二夏 三秋 卒八首 四冬 卒九首 五賀 十三首

六別 十又首 七恋上 四十六首 八雜上 卒九首 九雜上 卒六首 十旅 卒八首

惣已上四百十八首 代家定哥 并連歌

文章云

春歌之時雖入俳 勅定被四哥ホ

春ノ部八 歌不知 新院御製

霞のしたる春はなにはるなれはにほひそめにしかはるなるらん

四ノ中入 歌不知 藤原盛房

うちはらふ人もなかりしのの春はのやたのいろかん

左兵衛督家成の歌よ合しに侍りしに

春上ノ部十入 藤原頼保

いつの程人出しの柴ゆえうちはらひくさ春と海そひかりけり

左兵衛督家成の歌よ合に侍りしよ

元トアカ六八

[illegible]

元トアカ六九

[illegible]

新院御製

[illegible]

元トアカ七〇

[illegible]

新院御製

[illegible]

元トアカ七一

[illegible]

新院御製

[illegible]

已上七首

63 67